

## 第3回 関西広域連合「関西観光・文化振興計画策定委員会」

- 1 日 時 平成23年12月16日（金）午後1時～2時45分
- 2 会 場 京都平安ホテル「朱雀」
- 3 出席委員 別紙のとおり
- 4 主な発言内容

### （1）中間案の修正案について

○関西を売り込んでいく上で一番重要なことは、関西人が関西であるということ、関西は一体であるという意識を持つこと。KANSAIブランドの推進、構築、発信と並んで、関西の地元での意識の育成ないしは醸成が必要。

○KANSAIという言葉のロゴタイプでも作って、クールKANSAIとか、KANSAI百景のように使うことが重要。そこにこだわらないと連合でやっている意味がない。

#### ◆官民連携について

○官民連携の推進については、地域住民との協力が必要。観光は地域住民のためにやるので、地域住民の理解が重要。

○関西の経済界にも合意をしてもらうような形で一つの方向を提示するのが望ましく、一つの方向に向かえるベクトルにしてほしい。

#### ◆計画推進体制について

○実行する体制、事業費については、体制は何年かかけて構築していくということが必要。

○関西広域連合の事務局に全府県から担当者が出向して、観光分野の事務局体制を確立するぐらいでないと不十分ではないか。

### （2）KANSAI統合型リゾートについて

○カジノという言葉が入っているが、委員の中でもいろんな意見があり、まとまっておらず、方向が出ていないので、削除を検討してほしい。

○関西にはたくさんの観光資源があり、プライドを持ち、誇りうるものがある中に、わざわざカジノを作る必要はあるのか。光を観るといって観光の切り口で、カジノを語っていくのには相当な疑問を感じる。

○アジアの文化観光首都とカジノはどう整合するのか。ラスベガスでは、賭けるのが一番少ないのが日本人であるように、日本人とはそういう国民性。カジノを作るのであればマカオ以上のものを作らないと中途半端になってしまう。

○観光は、我々の生活文化の魅力で勝負をすべきで、カジノは我々の生活文化にはない。カジノ導入は接ぎ木であり、関西の魅力のメインストリームがあるはずなので、それに注力すべき。関西に相応しい富裕層はカジノ客ではないのではないか。

○カジノを導入するなら、ラスベガスのようなオープンな形が必要。ラスベガスも昔、マフィアと一体となってしまったが、これと縁を切ってオープンな形にした。

### (3) 広域観光ルートについて

- 日本には東アジアの文化が集積し、独自の発展をして、それが現在の日本産業の「ものづくり」の基盤を作っているので、そういうテーマも必要。
- テーマは、クール KANSAI が一番おもしろい。
- ルートが当たるには、ルート上の自治体、地域住民、事業者が本気になって商品にしないといけない。
- ルート上の景観が問題である。郊外の大型ショッピングセンターや街道筋の原色看板などがひどいが、ルートに沿って景観をどうしていくかを考えないといけない。
- 関西にとって奈良は大きな存在であり、ルート設定では考慮してほしい。中国では、誰に聞いても日本は温泉が一番。温泉を入れたルート設定は重要。
- ルートは実際の商品化をしようということではなく、テーマをモデル的に、そのイメージを伝える PR 手法として使うなら、非常にわかりやすい手法。
- 団体旅行のパッケージ商品化にエネルギーを注ぐよりは、関西の魅力を伝える手法として、テーマで PR していくツールを作り、リピーターにも来てもらえるようにした方が良い。
- 外国人がルートに沿って旅行をするとしたとき、外国人客を充分にもてなすことができるのか。言葉の問題や案内所も含めて大変な課題があるが、その覚悟が必要。
- ルートは幅広に網羅するというよりは、次はあそこに足を延ばしたいというような、飢えた食べ残し感が残るような設定も必要。
- 各スポットには通訳ガイドが必要。せつかくルートを作ってもガイドなどの説明がないのは駄目である。
- リピートの決め手は、最後は人である。あのときのガイド、タクシー、飲み屋の人が良かったとか、最後は人の印象しかない。

(別 紙)

### 第3回委員会 出席委員名簿

お役職等	氏 名 (五十音順: 敬称略)
和歌山大学名誉教授	大橋 昭一
京都嵯峨芸術大学芸術学部観光デザイン学科教授	坂上 英彦
朝日新聞東京本社 be編集長兼夕刊フィーチャー編集長	畑山 美和子
(社)日本ホテル協会常任理事	平岩 孝一郎
(社)日本観光振興協会副会長	船山 龍二